

朝日西遺跡



朝日西遺跡調査区位置図 1:10000
(斜線は自然堤)



外堀出土木札
(29.2cm×4.2cm)

「かちや町
六十六間三尺三寸
是より北(カ)」



外堀出土曲物
口径 12.0cm
器高 10.0cm

「白さたう
壱斤」



60D区 方形周溝墓

朝日西遺跡は、五条川左岸の南北に延びる自然堤上に立地し、西に清洲城下町遺跡が、東に朝日遺跡が接して位置する。昭和57年以来の調査によって、当遺跡は、13世紀から14世紀にかけての時期と、16世紀後半から17世紀初頭にかけての時期に、ピークを迎える中世から近世にかけての遺跡であることが判明している。前者をⅠ期、後者をⅡ期とし、Ⅱ期については、『清洲城』の一面に取り込まれている時期として位置付けている⁽¹⁾。

本年度の調査は、現道部の3区(60A～C区)と遺跡の東端にあたる2区(60D・E区)の計5箇所で行なった。(3,702㎡)

検出された遺構の内、特に注目すべきものとしては、D・E区で確認された大溝である。この大溝は、幅15m、深さ2.5mを計り、これを境に東側にはⅡ期の遺構が存在しないこと、清洲城下町遺跡で検出された大溝(中堀)と構造上類似していること等から、「清洲村古城図」(蓬左文庫蔵)に見られる外堀に該当するものと推定できる。したがって、この溝をもって、清洲城下町の東限とする。

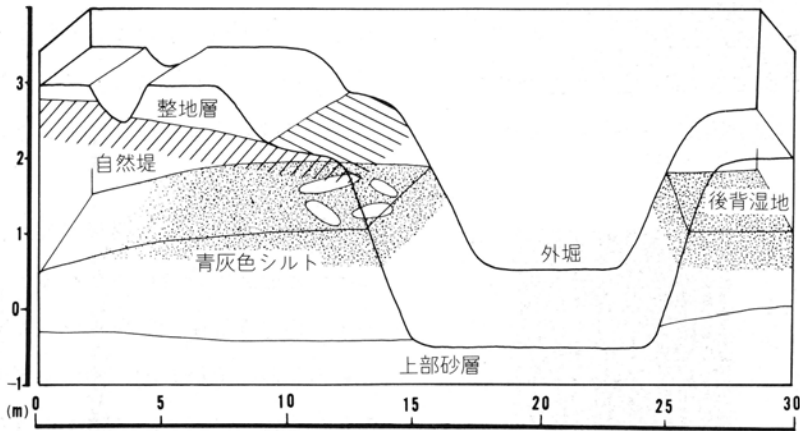
D・E区から出土した遺物は、当区が遺跡の外辺であることから、Ⅰ・Ⅱ期総じて少量である。主体は、瀬戸・美濃製品であり、わずかながら土師器、中国陶磁等が混入する。陶磁器以外に、曲物、笊、下駄、

漆椀等の木製品が見られる。中でも清洲城下の町割と思われる事項が墨書されている木札や墨書曲物が注目される。なお、D・E区ではその他、4基の方形周溝墓が確認された。これらは朝日遺跡の方形周溝墓西Ⅰ群に連なるものと推定できる⁽²⁾。弥生時代の基盤である青灰色シルトは、D・E区を境にして、西へ向い傾斜し、ここより西では弥生時代の遺構は確認出来ない。以上の諸点からD・E区の方形周溝墓は朝日遺跡の西限にあたることが判明した。

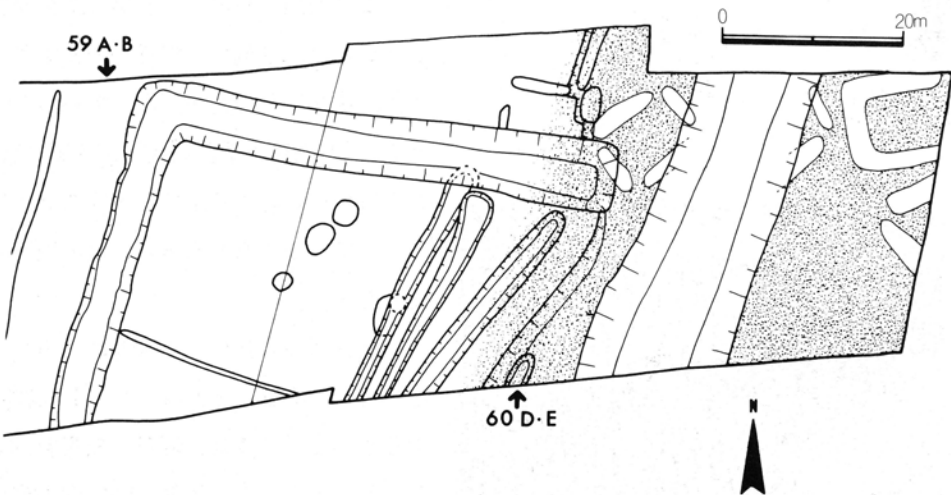
(佐藤公保)

〔注〕

- (1) 『環状2号線関係 埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』財団法人愛知県教育サービスセンター1984
『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』財団法人愛知県教育サービスセンター1985
- (2) 『環状2号線関係 埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』財団法人愛知県教育サービスセンター1983



朝日西遺跡 60D・E区土層模式図



朝日西遺跡 60D・E区遺構図